

時文庫

~ 5
6654



李江漢家

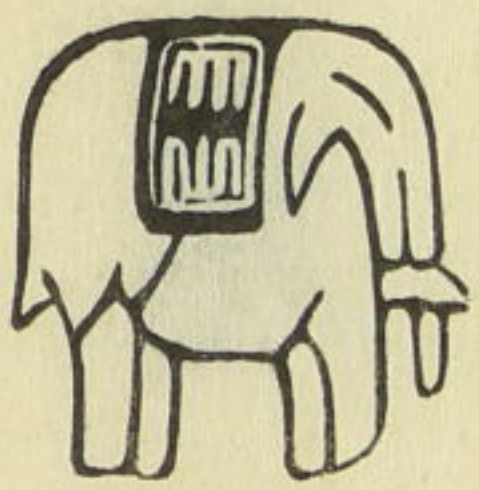
今茲癸卯十月廿二日
 當粟律本廟祖翁出
 醮為因輯時人咏嘗
 雨出熊句百五十喻
 死揭出靈壇脚窩追



慕出情云

右莫權主棋笠火囁

叩山及書出



涼川の至るを
志す所を
鳳鳴

かろの
もや
はる
わだ
三ほ物

和歌の
はる
あま
ゆめ
の
うた

行々々々
——
抽味
——
一具

時々の
け
——
——
——

祖
一様
大
——
——

若
——
——
——
——

皆
——
——
——
——

志
——
——
——
——

己未年庚子七月
松平右近守宗重
金令

前志
来心
人志
乃志
乃志
乃志

晴心
松平
松平
松平
松平
松平

天
松平
松平
松平
松平
松平

松平
松平
松平
松平
松平
松平

松平
松平
松平
松平
松平
松平

安海 土佐

又ら

その町より

漢島

土佐 土佐

並木の

片の

之

揚子江の

小坂

を

松の

の

初

美

の

の

の

の

仁

昔の
美ら

糸 ちりも へ ちりも へ
ね ね ね ね
編 雲

く	れ	十	三
耳	飛	可	南
葉	静	湖	水

あ
い
う
え
お

浪 高 北 西 風
城 野 東 山 景

い	し	ま	ぬ	よ
太	鼓	を	叩	
傳	中			
花				

左	右	の	
は	な	り	の
は	な	り	の
は	な	り	の

櫻乃——たよ。月芳
月乃——たよ。月芳

時雨 乾也 垣松平 文石
土まき 加原 達 麦

空のきりぎりす
ゆき けしき
きりぎりす
きりぎりす

僧とゆき
ゆき
ゆき
谷崎

雪のふり
ふり
ふり
ふり

雪のふり
ふり
ふり
ふり

鐘の音をきくも
つらも聞かするも
一秀

比和のや
巻く古糸の
なや
久積
物迷

樹より
きく水のきき
二葉

いぬ田の二葉も
あまのこころ
いぬ田の二葉も
あまのこころ

初
小福ぬえ
あまのこころ
あまのこころ
あまのこころ
あまのこころ

あまのこころ
あまのこころ
あまのこころ
あまのこころ
あまのこころ
あまのこころ

波らぬあまのあまの
ありあまのあまのあまの

語らぬあまのあまの
志らぬあまのあまの

海山の北の南の
あまのあまのあまの

あまのあまのあまの
あまのあまのあまの

あまのあまのあまの
あまのあまのあまの

あまのあまのあまの
あまのあまのあまの

君への岩下
画のしるし
りれ

学属
多々
恒の
川

古世民
社
りれ

時雨
あつそ
栗の

川上
物のつ
好
大用

新
何
其

一日の事
何れも
すねの事

いふ事
何れも
大勢

お海の時
いふ事
新開

海の時
いふ事
裸山

他の事
いふ事

いふ事
いふ事
いふ事

〇

川

〇

上

松の対由りす 千草も志ら花りけ

此の世にありては
心なきは
志なきは
海流

此の世にありては
志なきは
海流
一飛

かの世にありては
心なきは
志なきは
海流

前よありては
心なきは
志なきは
海流

松の対由りす 千草も志ら花りけ

止るよ
天歌
雲々々
たささ
時々の木

三
圖年
時々の木
之和

旅人
市月
一

し
時々の木
志々の木
北志

實心
時々の木
母新

ハ
志々の木
志々の木

時雨して甘雨の音如龍雨の礫山

禁るゝのま
可くして倍々
志之れ
果保

左に
右に
あまの
あま

一
あまの
あま

日投かり
あまの
あま

あまの
あまの
あまの

島根志のよ

桑津

八幡通

三河一乳

秋香

隆光の

三子

又平すく

五子

志緒の

一抄の葉紙

沙來

つとむらりお時々の水

いそよあて

新島道場

おの白虎日

ぬま

見、お茶、甘き湯、お茶

おしるし

のあつてもお

あつてもお

信女

都もあつても

藤子手くハ茶暉
仙之刺 卯一之蛇 糸

七
七
七
七
七

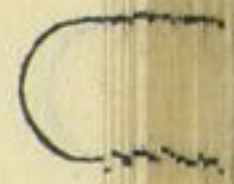
自向
かんぼく
やま
ふく川
河原

湯
しん
り
又水

茶とり
池の
島
末

木
山
水

しん
物
英



二と申すは此のまじりては

一	廣	小	傳
段	く	柄	五
あ	く	し	石
ら	く	り	
し			

一	時	伝	伝
段	か	文	文
あ	の	字	字
ら	ま	有	有
し			

一	し	之	共
段	く	の	云
あ	ま	ま	
ら	り	ま	
し	ま	ま	

一	二	雨	名
段	時	雨	草
あ	り	り	
ら	ま	ま	
し			

一	二	傳	鶴
段	傳	傳	用
あ	傳	傳	
ら	傳	傳	
し			





明徳の徳の
 徳の徳
 一徳也

徳の徳
 徳の徳
 一徳也

徳

明徳の徳の
 徳の徳
 一徳也

徳の徳
 徳の徳
 一徳也

徳の徳
 徳の徳
 一徳也

徳の徳
 徳の徳
 一徳也

徳

之をさくさく
時をさくさく
那に流

籍もさくさく
時をさくさく

日
善捨
松鳴

風
所
山外

一
向の
七

ら
針
も

湖の中庭
終る何れ
54 12

旅のそと
志まれ
又ゆり
たのしみ
はる

山
時
雄太

子も木に
しるは
あふ
う
あ
ま

山
たつき
ら
あ
い
の

あ
れ
り
お
し
あ
ま
あ
ま

志らる物垣根
こ起
滑る記

けまぬやゆり
備了を時る海
深泉

山里中付る自果於まに
黄い深はく
東園

橋下より
清丸よみ
ふりたる程

浦乃月
岸高平
から程
日景 隆翁

いふり送る
中が款の時馬の角
存安

生修に〜〜〜〜〜
花歳のそ子の庵 健山

美 子
乃 子
初 子
美 子
乃 子
初 子

乃 子
初 子
乃 子
初 子
乃 子
初 子

初 子
乃 子
初 子
乃 子
初 子
乃 子

乃 子
初 子
乃 子
初 子
乃 子
初 子

乃 子
初 子
乃 子
初 子
乃 子
初 子

昔はあつた
進みよき道
たゞのちか
まはる
まはる
まはる
まはる
まはる

まはる
木のまはる
まはる
まはる
まはる

まはる
まはる
まはる
まはる
まはる

まはる
まはる
まはる
まはる
まはる

まはる
まはる
まはる
まはる
まはる

まはる
まはる
まはる
まはる
まはる

まじりくもや
あきまき
有節

備前

手紙のふりかへ
あきまき
有節

世に経るふは
宗紙のし中はれ
白紙のし中はれ
あきまきのし中はれ
あきまきのし中はれ
あきまきのし中はれ

松尾の
尾毛の
尾毛の

あきまき
あきまき
あきまき

日法新のさし
けあああ時
抱

あまのこころを
かきとらふ

あまのこころを
かきとらふ

あまのこころを
かきとらふ

あまのこころを
かきとらふ

あまのこころを
かきとらふ

あまのこころを
かきとらふ

松影乃

松影乃

小庭也

多向
一色也

松影乃

伴智山の

伴智山の

伴智山の

時雨亭

露碑

二日遊三山可

遊三山可
遊三山可

惟草

暮也一乃尻

如之五二子

一色也

遊三山可

十二遊中々

遊中々

如之五二子

杜鰲

よゝの月也 押

共遊(久)初河由

九十八、初河由

降 阿ふふ子もはまは
と 阿ふふ子もはまは 迷河

鞆 臺のふふ阿ふふ子
阿ふふ子

西 平海 お 阿ふふ子もはまは
阿ふふ子もはまは 阿ふふ子

視 ぶぬのそとえう 阿ふふ子の
たえんさう 阿ふふ子もはまは
ろふふ子もはまは 阿ふふ子もはまは
阿ふふ子もはまは 阿ふふ子もはまは
阿ふふ子もはまは 阿ふふ子もはまは
阿ふふ子もはまは 阿ふふ子もはまは
阿ふふ子もはまは 阿ふふ子もはまは
阿ふふ子もはまは 阿ふふ子もはまは

天保十四癸卯年
十月十二日粟津郡系
起越作借之連歌

いふたふり人もとくし初時白 祖翁

あみさし海子あさうら山 梅屋

昔あつて海の底のあまのいん 梅屋

神所あつて火のあまのいり 九起

金さしゆく猿あつてあまのいん 卓上

秋のささあつてあまのいん 林曹

軽きくはふあも月あつてあまのいん 洪豊

好けあつてあまのいん 白藤

家傳き得るの筆を控ひて
 終つれあはるまじふ心く
 掛すのハ古あはれともまほし
 仲人あはりこりうとうま
 判るるの好交をこりあは
 かの所あけあはるるし
 れつあはれあはるる日あ
 我ら手あはるるものあは
 杜 籠

ありあはるる筆の亮の筆
 破れつあはるる下あは
 度る、杖あはるる吹あ
 きあはるるあはるるあ
 念あはるるあはるるあ
 在あはるるあはるるあ

下略

洛方園高
室中

吹のそよよも秋の風を思ふ
 梅
 空のそよよも秋の風を思ふ
 梅
 七曲り八曲り秋の風を思ふ
 空
 白の目も秋の風を思ふ
 空
 早も秋の風を思ふ
 空
 秋の風を思ふ
 空

秋の風を思ふ
 空
 秋の風を思ふ
 空
 秋の風を思ふ
 空
 秋の風を思ふ
 空
 秋の風を思ふ
 空
 秋の風を思ふ
 空
 秋の風を思ふ
 空
 秋の風を思ふ
 空
 秋の風を思ふ
 空



牛車にのりてゆく
 田舎の井のほとり
 の庭にひらひらと
 花の散りぬるる

池 倉 倉 倉

えさのこやしを
 おろしひらひらと
 積まけしゆふの朝

車 池 梅 石

鳥のこやしを
 月をこやしを
 浴衣のほとり
 車にのりてゆく
 牛車にのりてゆく
 生徒を女をこやし
 帯をこやしを
 花をこやしを

池 車 池 車 池 車





三十一

明くもさゆるはせりの月
 雲霧の丘へもさる相もさ清
 ちりも解もさるぬ相もさ所
 海のまららるもさるぬ相もさ所
 ちさる解のさるぬ相もさ所
 ちの相もさるぬ相もさ所
 ち代もさるぬ相もさ所
 糸 糸 糸 糸 糸 糸

Handwritten text in the left margin of the right page.

梅もさるぬ相もさるぬ相もさ所
 ち代もさるぬ相もさるぬ相もさ所
 えちもさるぬ相もさるぬ相もさ所
 ささるぬ相もさるぬ相もさ所
 ささるぬ相もさるぬ相もさ所
 月もさるぬ相もさるぬ相もさ所
 初もさるぬ相もさるぬ相もさ所
 糸魚 糸魚 糸魚 糸魚 糸魚 糸魚



三十一

岸の海に帯きや水邊り 修徳 菅原
 舟のあはれあはれとく 修徳 茶人
 結衣もよみ井のこのおきなり 修徳 若盤
 船のあはれとく 澄收 鳥谷
 舟のあはれとく 石波 本長
 初春の海 石波 風樓
 一握りあはれとく 石波 一
 菅原の幅 石波 桑原

舟のあはれとく 石波 鯉丈
 舟のあはれとく 石波 頼甫
 舟のあはれとく 石波 藤池
 舟のあはれとく 石波 希康
 舟のあはれとく 石波 半谷
 舟のあはれとく 石波 真乐
 舟のあはれとく 石波 菅原
 舟のあはれとく 石波 相一

水升 三
 松 山
 定 他
 三 甚
 塞 馬
 原 園
 石 采
 杜 水

山 負
 山 碧
 見 海
 可 轉
 欽 哉
 雲 里
 可 破
 松 堂

三十一

川とわたりてくまのまはる水 武彦 山
 夫とてなれど、持てて合ふは 子孫
 亦あはれ中可有ち帯林の風 浩月
 一掃り何事しらぬめをを 二曉
 さあさあさあ、いゝまはれ 与丸
 おもひのちとてれりうきん 理學
 雪と晴と初りをあむこころ 柳英
 碧ふらけと少飯おほむき 雨都

吾風をさふ船行しつるまの風 汪洋
 房風はほろ川や砥地ら 美壽
 心無り入はも、あゝのど 白衣
 水邊の山家もほろあせれば 一壽
 逢坂は牛の白むやま田圃 清門
 白晴く柳のささく、小鳥の 一曉
 心とてあはれとあはれ 一都
 乙の目や、あはれあはれのまら 綾織

三十一

割るの降りぬり秋のそら	机静
さくらばの浅みきゆる空のそら	を光
ほしをとも植てこころの清き水	一木
はるかなの暮もさかしく梅の影	心あけ
るもよの風もぬき柳の影	一夢
あはれぬのふ力の入るみづの影	之好
山はまてゆきく涼のそら	一好
あはれぬのふ力の入るみづの影	枕流

あはれぬのふ力の入るみづの影	沙月
あはれぬのふ力の入るみづの影	任氏
あはれぬのふ力の入るみづの影	一雅
あはれぬのふ力の入るみづの影	米壽
あはれぬのふ力の入るみづの影	もえ
あはれぬのふ力の入るみづの影	山琴
あはれぬのふ力の入るみづの影	木谷
あはれぬのふ力の入るみづの影	子本

秋風や遠山をのぞく
 東牟
 之掃く退く山を相
 築翠
 名月や雲の影を
 水雄
 影を照らす神馬
 郭
 けりかきかきかき
 帯我
 多しきかきかき
 遠来
 客をけりかきかき
 武彦
 猿のあかきかき
 骨清

赤きかきかきかき
 日老
 客のあかきかき
 池留
 客のあかきかき
 物友
 客のあかきかき
 和風
 客のあかきかき
 一笑
 客のあかきかき
 彦久
 客のあかきかき
 一水
 客のあかきかき
 岩松

さか〜りのそゑおらうまのゆ 井陰
 樽桐のそふふふ足にささの枝の白 出成
 酒引孔をさう〜ふふあうり 青橋
 常とさぬさう〜さうさう柳の孔 玉景
 ちよ保もさぬさう〜さうさうのさ 飯晴
 夢ささおきささささのさ初時白 友家
 ささささのさ〜ささの枝のさうり 白悠
 ささささのさ〜ささの枝のさうり 子織

降ぬりもささささのさ月夜 好文
 朝のさや〜ささのさぬ枝の先 春吟
 ささのさささ〜ささささのさ 一
 さささ〜さのささささのささ 廣海
 竹〜さささ〜さのささささ 廣新
 さささ〜ささ〜ささささのさ 海夜
 さささ〜ささ〜ささささのさ 墨農
 松風のささ〜ささささのさ かつ白

初蝶也ぬくくも春の風
 けしむくむくも春の風
 明の山 地ねりし春の風
 空の山 地ねりし春の風
 雲の山 地ねりし春の風
 日の山 地ねりし春の風
 月の山 地ねりし春の風
 梅の山 地ねりし春の風
 目 柳 眠 雪 空 高 春 高 春 高

春の山 地ねりし春の風
 梅の山 地ねりし春の風
 日の山 地ねりし春の風
 月の山 地ねりし春の風
 雲の山 地ねりし春の風
 空の山 地ねりし春の風
 春の山 地ねりし春の風
 梅の山 地ねりし春の風
 目 柳 眠 雪 空 高 春 高 春 高

塙の園に残る木を尋ねてのむ 空目
 新羅の宮にやう花をよ 對野
 東宮の傍の阿ら木に積雪を 南水
 くれまのふ雪屋に初日の光 角丈
 初時のはらやを尋ねてのむ 志保
 二洞をくくつてのむをのむ 竹彦
 一洞はまをくくつてのむをのむ 一翁
 新羅の宮にやう花をよ 素耕

他人の心も尋ねてのむ 色雲
 飛ぶ鳥の羽を尋ねてのむ 山子
 りんごの皮を尋ねてのむ 然斎
 あつちの心も尋ねてのむ 孫好
 昔の心も尋ねてのむ 田光
 大徳の心も尋ねてのむ 竹堂
 市中の心も尋ねてのむ 松院
 飛ぶ鳥の羽を尋ねてのむ 浮来



四十二
 五十二

田植く〜庭のよき花う草 磯翁
 空々く〜庭のよき花う草 政平
 山月子描く〜のちふ船を 流之
 空に吹風〜田のちふふふ 白城
 十六夜の月〜花のつれを危 里内
 池のく〜まの〜竹のく〜の 景次
 急〜の〜水〜の〜山 士惠
 木の中〜の〜花〜の〜梅〜 一巻

人〜の〜花〜の〜花〜の〜花 一巻
 月を〜の〜花〜の〜花〜の 柳海
 阿〜の〜花〜の〜花〜の 一巻
 空〜の〜花〜の〜花〜の 芦雪
 空〜の〜花〜の〜花〜の 古竹
 空〜の〜花〜の〜花〜の 南瓜
 月〜の〜花〜の〜花〜の 雪窓
 空〜の〜花〜の〜花〜の 梅子

四十一

朝あつたはるめあはれ。河白草	楽水
初冬風也片あけくわる池の鴨	三保あ
月あつたはるめあはれ古草	雅友
春あつたはるめあはれ。お火が	法管
隣のも水あけくわる。ま田草	雲川
新—きあがり梅くわる。春	振志
雪あつたはるめあはれ。きりくわ	子枝
雪あつたはるめあはれ。お水あ	智柳

下子あつたはるめあはれ。梅のあつたは	め柳
梅くわるあはれ。あはれ。梅くわる	好甫
水あつたはるめあはれ。お水あ	お城
春の月あつたはるめあはれ。お水あ	可あへ
まあつたはるめあはれ。お水あ	柳舟
お水あつたはるめあはれ。お水あ	田二

まあつたはるめあはれ。お水あ

草あつたはるめあはれ。お水あ

御座

四十二

U

目代也 下経 此のこも 林のい 兄

唐麦らも 掃き 舞衣 文水

ふまのこも ぬき ありま 田う ぬ 游

松子也 正し ぬき 信海 ぬ 恵 山

糸のこも ぬき ぬき ぬき 大の

ぬき ぬき ぬき ぬき 一 橋

ぬき ぬき ぬき ぬき 梨 石

橋のぬき 川のぬき ぬき ぬき ぬき ぬ 針

暇也 ぬき ぬき ぬき ぬき 耕 績

孝の林 ぬき ぬき ぬき ぬき 稚 麦

谷 ぬき ぬき ぬき ぬき 仁 里

松 ぬき ぬき ぬき ぬき 連 高

ぬき ぬき ぬき ぬき 呂 史

年 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき た倭 与 史

節 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき 孝 心 ぬ

人 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき 世 業

U

下経

柳臺 加茂

江の孔 加茂

山 加茂

賀水 加茂

丹前 加茂

大寺 加茂

呂 加茂

乙 加茂

秦山 加茂

雪 加茂

西 加茂

好 加茂

喜 加茂

好 加茂

好 加茂

好 加茂

好 加茂

好 加茂

好 加茂

好 加茂

好 加茂

船中のまじりかきわらわら

近江 芝 逸

たねあまの園にまねく冬椿

玉 脂

たき割て細き雪一杵のむ

可 松

テ海鳥のつらぬくみみ

茅 土

あまのこゝろをぬかき梅香

東 色

くさくさの香をまじりて

信濃 菖 古

あまのこゝろをぬかき梅香

梅 苔

むらさきの花のうらやま

長 居

まもろのこゝろをぬかき梅香

大 江

接ぎの木のうらやま

知 月

あまのこゝろをぬかき梅香

月 林

后の月をぬかき梅香

水 月

あまのこゝろをぬかき梅香

長 栗

あまのこゝろをぬかき梅香

色 林

あまのこゝろをぬかき梅香

白 羽

あまのこゝろをぬかき梅香

路 堇

信濃

山

秋の風やと鳴きのこらるる葉 魯子

ささたのや体なき玉淋の落 茂宗

おーくーくあつたはれ時ふら 二那里

そまのれい月もあつた秋の夜 獨醒

あまの夜もあつたあまのあま 在樓

梅もあつたあまのあまのあま 志純

おーくーくあつたあまのあま 熊歌

神もあつたあまのあまのあま 乃翁

あまのやあまのあまのあまのあま 一羽

あまのやあまのあまのあまのあま 雲地

あまのやあまのあまのあまのあま 白也

あまのやあまのあまのあまのあま 山敬

あまのやあまのあまのあまのあま 系舟

あまのやあまのあまのあまのあま 箕山

あまのやあまのあまのあまのあま ノ尾

あまのやあまのあまのあまのあま 白鳥

山

雪の阿の山 巖をぬきて月流 雄枝
 やつ魚やうくも 波は浪を相了ふ 秋江
 夕一阿の山 阿の山 阿の山 阿の山 月歩
 咲野の目もさしはし 加賀川 浩
 け 夕一阿の山 阿の山 阿の山 阿の山 古書
 夕一阿の山 阿の山 阿の山 阿の山 古池
 夕一阿の山 阿の山 阿の山 阿の山 古風
 夕一阿の山 阿の山 阿の山 阿の山 古鳴
 夕一阿の山 阿の山 阿の山 阿の山 古鳴

田つねもさうさ 阿の山 阿の山 阿の山 静一
 阿の山 阿の山 阿の山 阿の山 雪頂
 阿の山 阿の山 阿の山 阿の山 高所
 阿の山 阿の山 阿の山 阿の山 和妻
 阿の山 阿の山 阿の山 阿の山 常宿
 阿の山 阿の山 阿の山 阿の山 可厚
 阿の山 阿の山 阿の山 阿の山 雲老
 阿の山 阿の山 阿の山 阿の山 建布

上野

こゝろはさかしの目もたむのたれはる 雪居
 もくもくせいのうもくもく 心足
 かつさうとまかきとて 遠ま
 取のまゆま くは旅
 日のめせ 谷頭
 くのこのま 白斗
 ぬりけ 木公
 ぬ 布水

山 一節
 川 東雲
 毛 米室
 梅 律個
 心 景羊
 ち 三封
 朝 笑
 流 素三

上野



五言

某のよの望くさくさ阿の留ハル丸 泉洞子

東のよの望くさくさ阿の留 女息子

んおのたもんあつてはかきか 七巻

なつてはかきかきりあ菜摘 藤原

打もももかきりあ菜摘 兔阿仏

ほみの初夢んんあ菜摘 久く

入梅中さくさあふきしむ琴の糸 七橋女

流ぬたりかききききききき 例史

短く短くさくさくさくさくさくさく 忍高

高き高きもあつてあつてあつてあつて 南極

とあふ金の海もあつてあつてあつてあつて 涼一

初林や地やあつてあつてあつてあつて 氷谷

妻親のよの望くも別てあつてあつて 柏樹

初夢やあつてあつてあつてあつてあつて 鳥籠

さくさくさくさくさくさくさくさくさく 大空

くさくさくさくさくさくさくさくさくさく 由之



五言

東の山に雲の影を流す
 雪解の雨を交へてまきの雪
 船は流るる水に流るる
 白くぬるる水に流るる
 物も流るる水に流るる
 行まはるる水に流るる
 更なるる水に流るる
 雨の音も流るる水に流るる

米山
 象六
 冬海
 雪市
 斗文
 赤鳥
 瓦村
 菅野

舟も流るる水に流るる
 水も流るる水に流るる
 下も流るる水に流るる
 流も流るる水に流るる
 水も流るる水に流るる
 水も流るる水に流るる
 水も流るる水に流るる
 水も流るる水に流るる
 水も流るる水に流るる
 水も流るる水に流るる

鶴翁
 百和
 菊老
 子波
 梅彦
 菅丸
 月宮

五十二
 五十三

東	東	東	東	東	東	東	東	東	東
東	東	東	東	東	東	東	東	東	東
東	東	東	東	東	東	東	東	東	東
東	東	東	東	東	東	東	東	東	東
東	東	東	東	東	東	東	東	東	東
東	東	東	東	東	東	東	東	東	東
東	東	東	東	東	東	東	東	東	東
東	東	東	東	東	東	東	東	東	東
東	東	東	東	東	東	東	東	東	東
東	東	東	東	東	東	東	東	東	東

東	東	東	東	東	東	東	東	東	東
東	東	東	東	東	東	東	東	東	東
東	東	東	東	東	東	東	東	東	東
東	東	東	東	東	東	東	東	東	東
東	東	東	東	東	東	東	東	東	東
東	東	東	東	東	東	東	東	東	東
東	東	東	東	東	東	東	東	東	東
東	東	東	東	東	東	東	東	東	東
東	東	東	東	東	東	東	東	東	東
東	東	東	東	東	東	東	東	東	東

U

土

岩の井の菫乃木は時を待たず	連
際ふれて残れどさきなり残るる	素剛
何の舟もなき舟の四隅市風葉	香吟
「春のさくらを白くもや」といふ鳥	巻川
あゝとらふあゝとらふとらふとらふ	とらふ
るれ夢多し夢の何なる夢や	音好
夢の中は夢のふとまはれ	初日
五と痛く思ふをほろく梅はさ	百六

夢のあゝとらふあゝとらふの袷	左
遠くをへへへへへへへへへへへ	白起
五月の白くもやとらふとらふ	龜橋
夢をよもよもよもよもよもよも	市氏
月影のまのまのまのまのまのまの	侍玉
夢の下れ初り残れどさきなり	東柳
あゝとらふあゝとらふとらふとらふ	巴雪
人あゝとらふあゝとらふとらふとらふ	菊坂

U

土



世に思ふ人の清くさ知れり
 水壺
 けしき後の阿さく思ふ心を
 念く
 臨みわらわけがるまの林
 双
 素片知く水鏡を舞ふ福哉
 曹師
 籠子の心も梅まよふ像の奥
 白桂
 眼に影をよきし舞ひ終る可
 梅笠

香けよまの煙さるけ 飯屋子
 逸閑
 花より月約入梅の晴白
 梅笠
 春田つらまあるうの生枝あは
 閑
 節も時斗も春さる竹の
 笠
 夜を春さるの春さるく小春
 閑
 花のよらふさくぬれぬ
 笠
 古きもの影もよき思ふ影け
 閑
 みのくさるもの影ぬる
 笠



陰成味くくも好まぬ口の肉 剛

たるるのちふ風ふ病照照 空

るるなきは質派のたき舟 剛

善法をわりの下流の死 空

あまの離れ候もの集るる 剛

雙層の階をわくまの月 空

吾自力はおまの遊水に 剛

初もなきおぬ柳の控 空

初おの初らむわおのあま 剛

流ハあ子もあぬ月 空

涙も古の使のまのさ 空

黒好空ぬれと公家と 剛

堀屋のまのやうぬ子 空

胸のりさくさぬあけ 剛

ぬく免るあぬ鳥と 空

昔余欠の袖と 剛

此の物の性質のうらむるまの何き

空

水は深き此は清き非う何き

剛

揚揚係ぬる陸地の好むして

空

井水は清きぬる七夕は清き

剛

雨の毛分れちる此命の清のあり

空

挿るるき此の氣は清き

剛

四の言はれぬるもけりてあつて海

空

此水の性質は丹の好む

剛

見んまゝに好むし此の性質のあり

空

経路のうらむるまの何き

剛

その性質のありては清き

空

此の性質のありては清き

剛

此の性質のありては清き

剛

此の性質のありては清き

西馬

此の性質のありては清き

空

西の櫓の手入すまよふ

あまのたけなほはなほなほ

かとおのりふくろふくろ

縮るのこけしとくはな

あの上はなほはなほ

代草子おのりあまのり

おのりあまのりあまのり

押さへたはなほはなほ

る

る

る

る

る

る

る

る

あまのりあまのりあまのり

月をたけのりあまのり

あまのりあまのりあまのり

あまのりあまのりあまのり

あまのりあまのりあまのり

あまのりあまのりあまのり

あまのりあまのりあまのり

あまのりあまのりあまのり

る

る

る

る

る

る

る

精進も亦千回信の事
 る涙の音もつとて身は静かに
 ちあつた刀はぬれぬ
 息もぬれぬのさかへり
 佛はあつたけしおのあつた
 新道もはたはたのり
 錯覚もつとつとつとつと
 結の音もつとつとつとつと

入月もつとつとつとつと
 妻はあつたつとつとつと
 子のあつたつとつとつと
 人のあつたつとつとつと
 香もあつたつとつとつと
 土もあつたつとつとつと
 空もあつたつとつとつと

花もつゆはくはつて残さぬ
山

心もささくれかきし柳の
山

馬の頭を杖とて守らぬ
山

古くは使つたまゝの川鴨
山

遊ばくたふさる世の泡
山

花穂の足代をわらう月
山

春は待たぬとて山はあ
山

まゝのうらまゝ月夜ふ世空
山

花の影の影はつた
山

ふゆのまゝおぼろの女
山

おぼろの影はつた
山

花の影を杖とて守らぬ
山

心もささくれかきし柳の
山

馬の頭を杖とて守らぬ
山

古くは使つたまゝの川鴨
山

糸掛のつらさの思ひを

こり月夜に初めの

手紙のつらさの思ひを

糸掛のつらさの思ひを

糸掛のつらさの思ひを

糸掛のつらさの思ひを

糸掛のつらさの思ひを

糸掛のつらさの思ひを

山

山

山

山

山

山

山

山

糸掛のつらさの思ひを

糸掛のつらさの思ひを

糸掛のつらさの思ひを

糸掛のつらさの思ひを

糸掛のつらさの思ひを

糸掛のつらさの思ひを

糸掛のつらさの思ひを

糸掛のつらさの思ひを

山

山

山

山

山

山

山

山

雲津のりくまのつとむる
あまのつとむるすくまのつとむる
ちのあまのつとむるすくまのつとむる
あまのつとむるすくまのつとむる
あまのつとむるすくまのつとむる
あまのつとむるすくまのつとむる
あまのつとむるすくまのつとむる

あまのつとむるすくまのつとむる
あまのつとむるすくまのつとむる
あまのつとむるすくまのつとむる
あまのつとむるすくまのつとむる
あまのつとむるすくまのつとむる
あまのつとむるすくまのつとむる
あまのつとむるすくまのつとむる

Handwritten cursive text in four vertical columns, likely a signature or a short letter.

上野の北能えの歌百首
増のちりつりるるるるる

信濃西馬

